

2010年初頭にオランダ出身のバロック・ヴァイオリンの大家であるヤープ・シュレーダーの著書「バッハの無伴奏ヴァイオリンを弾くーバロック奏法の視点からー」の日本語訳が寺西肇氏の訳で春秋社から出版された。原書も勿論だが、日本語訳も労作で、前半のバロック奏法の一般論から技術的解説を経て、後半の各6曲についての記述は詳しく各楽章にまで及ぶ。

今年度2010年4月からは東京音楽大学の大学院生ヴァイオリン専攻が5人に増えたのを機に、彼等のための特殊研究授業として、この本を皆で読み、演奏法を研究することとした。ソナタ第1番BWV1001は、シュレーダー自身の録音や、イギリス籍女流のアリーナ・イブラギモヴァの素晴らしい音源を参考にしたりし読み進んだ。パルティータ第1番ロ短調BWV1002は、演奏される（また勉強される）チャンスも少ないので、各楽章を学生たちに実際に演奏してもらうこととした。しかし、演奏は完璧なものを目指すのではなく、各楽章の基本的な技術等の問題を取り扱い、バロック奏法と従来の奏法の相違点と、また共通点を確認するにとどめた。

私自身もそうだが、学生たちもみな、やはり左手に関しては重音と和音の音程の難しさと、右手に関しては移弦の多様性に苦心していた。

この曲は4つの舞曲と夫々に付随する変奏ともいべきドゥーブルの計8楽章から成っている。この授業は11月で終えたが、最後には、学生たちの口から舞曲とそのドゥーブルを2人で合奏したい、との希望が出て、実際に弾いてもみたので、私には大変嬉しかった。

この曲を勉強する際には、すべて暗譜し、例えば舞曲の楽譜を見ながらそのドゥーブルを弾いたり、その逆にドゥーブルの楽譜を見て、その元となった舞曲を弾いてみると、和声的な組立や、重要な音、更には全体の流れ等をつかみやすく、大変有益である。

余談だが、今から10余年前に私はこの曲の各ドゥーブルに、もう一つ自分流のドゥーブルを考案（作曲）し公開のコンサートで演奏したことがある。

さて、この本には非常に参考になる事柄がたくさん盛り込まれてあり、誰もが自分の見解を見直すきっかけを持つことができる。

私もこの数年、悶える様にバッハの演奏法について考えてきたが、ここに来て、バロックの精神は尊重しつつも自分の独自の、自分が納得できる演奏法にするべきだ、との結論に至った。バロックの専門家たちの演奏は、大変面白く、場合によっては意表を突く様に奇想天外で、躍動感やスリル満点の名人芸的スピード感にあふれ、刺激的で、時には極度に興奮するのだが、「美しい」と感じたことは一度もない。この「美しさ」というものは、芸術、特に音楽芸術にとっては絶対欠かせないもの、と思う。

美しさと刺激的なものを融合させることができれば.....と思いながら新しいスタイルを築いていきたい。そう決心し、11月中ドイツでバッハを弾いてきた。

まだ 100%満足いくものには程遠いが、一応自分でも新境地と思ったし、聴いて下さった方々も認めてくださった。また年齢を重ねる毎に上達する（やはり昔は下手だったのかな？と自嘲しながら）とも言われたので、自惚れずに精進し、2011年以後、また新たな気持ちと意気込みで、バッハの無伴奏に取り組みたい。